

山に棲むものたち

ツツジの花だんご

いろんなこどしで、やっぱしね、遊んで。まあ、今みでにお菓子だのなんかないがらね。山んさ行って、食べるにいいもん、なーんでも採って食べたの。

うん、ハシカミの実ってねえ、あのナンキンマメのような味すんの、油っこくて。それさ、あのイカイカイかつうの、棘あったの、被ってるのよ。それを手で取ると痛い、こゆうみな刺さるから。それを石でこうつぶすのよ、ペチャペチャペチャペチャ。つぶしたら、それをむいて、中の実をとって食べるの。いっそお、みんなズアーツと並んで、向いんなって。遊びさ行った子どもたち揃ってさあ。で、「あ、だれそれさ、ねえのかあ。ほんでこれあっから、ほら呉っから」なんて。

で、春んなとこんど、あいつ、ツツジ。赤いのね。これはねえ、枝折しよるのよ。末の方枝折しよってえ、で枝、本のこごさだけ、二本だけ枝っここう付けて。上のこごの枝、さっぱりきれいに落ろすのよ。そしてツツジをこんどは、ツツジの花採ってえ、中のおしべつつうの、あいつもみな取ってえ、あのツツジの花っこ、こうズーッと（穴に枝を）刺してえ。順ぐりに刺すのよお。こごまでいっぱい刺さるは。うん、重ねんだいっぱい、スコスコスコどねえ。でみな重ねだ人、食べないで持つでるわけ。「さ、みんな終わったかあ、みんな重ねだかあ」って。「うん」て。「花だんごだどお、一、二の三で食べんだぞお」。でこごところごお、両端押さえでねえ、食べるのよお。アグアグアグって。甘酸っぱいんだ。

うん、きれえなんだ、花だんご。「あ、だんご出来たかあ」「ああ、おらあ、出来だよお」って、持って。「まだ駄目だよお、食べてえ」なんて。面倒くせえんだ、男の子は。「なーんて、面倒くせえ」「まだほれしか作んねえのか」なんて。で女の人たち手伝って。で食べるの速んだ、こんど男の人たち。「一、二の三で食べんだよお」なんて、食べた。

あんまり、食べて腹痛みもしながったしね。そのかわりね、「道路の縁のツツジは食べてだめ」つつうの、親たち。ゴミがかかるから。「山の中のツツジだらいいぞ」って言われで。だら山ん中のツツジ。ほって、あともうひとつの花はね、大きい花あるんだ。それは、イヌツツジって言ってね、「あれはイヌツツジだから、食べちゃだめだよお」って。うん、「あれ食べてだめ」、「これ食べてよし」って教えられたね。

（『升沢にくらす』 p.223）

赤ん坊の泣き声をまねるキツネ

キツネと遇ったらば、普通の顔で遇ってはだめなんだと。子供ながらに、口を曲げたり鼻を曲げたり、あっかんべをしたりして。キツネつつうのは、何回も振り向いて見るもんだからねえ。そうやって通り抜けねきゃいけねえんだよ。またキツネに遇うと、「ああ、さっきの女だなあ。こいつも、いいかげん馬鹿にしようかなあ」って、馬鹿にされやすいんだって。

ここは夜になると、赤ん坊の泣き声はキツネなんだね。キツネがそのように泣かせるの。キツネの

赤ん坊の泣き声は聞いたことある。すっかり赤ちゃんと同じ。初めて聞いた、私。それも雪いっぱいある時だね。

ここ行くと分校あって、左側に立ってた石あるでしょ、山の神って、書かれた石。あそこのとこさ。私、冬だよ、ちょうど今頃、うちのお父さんがずっと下の部落でお酒飲んで、「迎えに来い」って、私言われてね。「なんだ、歩いてこれないほど飲んだのかなあ。寒いとこなあ」と思って、私行ったのよ、懐中電灯一つ点けて。

ちょっと、山の神のとこ立ち寄ったら、こっちの方で赤ん坊の声聞こえんだねえ。「馬鹿だなあ。おまえは」って、私こう言ったの。「こんな雪の上に、赤ん坊置くやつあるか。おれが馬鹿だと思ったっけ、おれ以上馬鹿だ」って、こう言ったの、私ね。「だれがそこに赤ん坊いると思って、そつつ探し行く人いるんだっけなやあ」、こう言って私ずっと行ったのよ、迎えに。

迎えに行ってきた、「ちょっとここ止まって」って、言ったっけ、また泣くのよ。あれまた、赤ん坊の声泣くからさ、「さっきから泣いてんだぞ」って、言ったのよ。

「よっぽど馬鹿だなあ、おまえ。おれが馬鹿だと思ったら、おれ以上馬鹿だ」って、私こう言ったの。

だれでもあそこ行くと聞くって言うからねえ。他にも聞いた人いるんだよ。山の神の向こうの田んぼの端。

(『升沢にくらす』 p.218-9)

キツネ火に送られる

うちのお父さん（夫）がねえ、権現茶屋のそばの家でお酒ご馳走になって、懐中電灯は点けてきたんだよ。で、権現茶屋のとこさ来たっけ、父ちゃんのそばさ、灯があるんだって。ボボーッ、ボボーッと、灯ね。「なんだ、こいつは。おれ、懐中電灯点けているのに、灯…」。その時はキツネだとは思わなかったんだと思うよ。

私はその時、外灯点けてたの。「ああ、おら家、ここだな」って。ここまで送ってきたんだって、その灯が。そして「キツネに送られて来た」って家（うち）さ帰ってきたのよ。「なんでわかったの？」ついたら、「だって、青光の火玉、おれ懐中電灯点けてこうしているのに、ここのとこ火玉が、バーッ、バッバーッて上がるんだ」つつうの。

「へーえ。キツネ火ってこいうなのかなあ。私も聞いたことねえなあ」って。そして小川さんの婆ちゃんに聞いたの。したらほういうのだった、キツネ火って。キツネがそば並んで歩いてね、キツネの息がハーッとした時、ババッと青く見えるんだって。結構明るいんだって。で、「ここに外灯点かっているから、『あ、おら家ここだな』っておれ言って、こっち入ったけど、そっからいなくなったわ」って言ったの。

「んだら、そこで別れる時、『ありがとうね』って言ってきたらよかったべさ」って私言ったの。

(『升沢にくらす』 p)

死んだっぷりをするムジナ

そゆよなこど、うんとあったや。マサカリで伐るような、割るような音…なーに、木い倒れねんだ、だから音だけで。そいつ、むかあしあったんでさ。思えばそゆなんであって、本当あほの、むかしだからムジナ、ムジナってタヌキや、タヌキがさ、ほの山小屋の屋根、カヤで雪入んねえようしどくのや。ムジナがそのカヤさ来てえ、ゴーシゴシどこすった音が、木い、伐ったような音だの、もっけえすような音すんのが、ムジナだって、むかしそう言っでたのさ。やっぱりムジナ、藪っ中さ背中こすってぐのほれ、木い倒れるような音すんだ。

あいつ、むかしっから、タヌキつつうのさ、死んだっぷりするつつうの、本当なんだな。うん、つかまっても死んでんだ。持つてきてしゃ、こゆな梁のとごさ、縄でぶらさげとくっちゃ？ 足結つけて。ほんでもほゆこどしてる。ほしでさあ、人の音しねぐなっところんなっどやあ、ちゃんとやって、縄切ってや、出はってくんだから。歯あで、うまいんだ本当に、縄だと切ってくんだ、やっぱり。半日ぐれえなら、なんでもねぐ、死んだっぷりしてっど。なんぼ、おっくり返したって、ひっくり返したってや、ピクッともねえでやあ。

ほんだね。むかしの人ほんだから、ほれ、タヌキにだまさったつつの。

(『升沢にくらす』 p.220)